

---

# ルグラン嬢の肖像

ekitai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルグラン嬢の肖像

### 【Zコード】

N4011D

### 【作者名】

ekitai

### 【あらすじ】

幼いマリーは、父がいつも着ていた服が無くなっているのに気づいた。しかし母のミレはそんな娘を茶化すだけである。ある夜更けの小さな事件。

「まつたく、信じられないわ」

高く澄んだ声が、廊下の奥の部屋から聞こえてきた。

普段の石造りの家は音を響かせ、言葉を曇らせるが、今日の寒さのためにリビングにまではっきりと届いたのだ。

食後の落ち着いた時間に満足していたミレは、何事かと心配になり声がする方を見つめた。

「ねえ、お母様、聞いてよ」

タンスの戸を開めた音に続いて、怒った様子で娘のマリーが飛び込んでくる。

部屋まで入ってきた彼女を、暖炉の火は暖かく迎えた。

「最近、お父様のいつものセータを見かけないと思ったら、誰かにあげてしまったんだわ。高かつたのに」

紅潮した顔で、わずかに声を弾ませながら母に訴えかける。

「そんなの、まだわからぬじやないの」

ミレは息巻く娘に反して、からかうように答えた。

「きっとそうだわ、あんなに気に入つてたんですねもの」

そう言いつつ、まだ12歳になつたばかりの彼女は、部屋の中を歩き回る。

小さな白いブラウスが、炎に照らされ、明るいオレンジをほのかに乗せていた。

マリー・アデルフィーヌ・ルグランは学校では明敏で、特に歴史の成績が良く先生から褒められることも多いが、家の中では甘え盛りでこうして親、おもに母にだがおしゃべりをよくした。

ミレは仕事の麦わら帽子作りの最中でも、いつだって娘との会話を楽しんでいた。

「セータ飽きちゃったのかな」

窓際に立ち、深緑のカーテンの透き間に手を分け入れて、外を眺

めつゝマリーはつぶやいた。

白樺の林は、ただ静寂を称えるばかり。

「そんなことはないと思つの」

ミレは言つてみたが、そろそろ湖にも氷がはる季節である。防寒着を人に貸したと考えるのは、その身を案じる家族でなくとも難しいだろう。

マリーは変わらず沈んだ庭を見続ける。ガラスに映つた不安そうな幼い顔に、ミレは愛情を抱かずにはいられなかつた。

「きっと大丈夫よ。そういえば、そろそろお父様の誕生日ね」「誰が聞いてもわざとらしさを感じる言い回しだつたが、しかしこのときのマリーには全く気づかれるとはなかつた。

「ねえ、覚えてるかしら」

「知らない、そういうえばそうだつたかも」

母からの質問にあわてて答えて、マリーの声はうわずつていて。何かを悟りられまいとして急いで部屋から出て行つた。

肩から一房こぼれ落ちたやわらかに波立つブラウンの髪が印象的だつた。

笑顔で見送つたミレは、まだかすかに湯気立つコーヒーに口をつける。

小さく含み笑いして一呼吸すると、新しい帽子の図案に目を落とし、そのままそれに没入した。

実は父も母も娘が隠れてセータを編んでいたことを知つていたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4011d/>

---

ルグラン嬢の肖像

2011年2月1日03時17分発行